

Cross Bleed

R-18G

※スレインが人外の伊奈スレパラレル本です。

※欠損、カニバリズム、特殊設定のオンパレードです。

目次

一、孤児×武器	3
二、海賊×人魚	13
三、フォーク×ケーキ	19
四、狩人×天使	23
五、童×鬼	29
六、学生×犬	37
七、勇者×エルフ	41
八、書生×蜘蛛	49
九、彫師×情人	55
十、オーデイン×フェンリル	63
十一、ジュース×アイス	69
十二、科学者×モルモット	75
十三、軍人×囚人	81
あとがき	88

孤児×武器

伊奈帆 (18) × スレイン (19)

「準備オーケー」

『こっちも』

「調子は？」

『上々さ』

伊奈帆は小さく口笛を吹いた。汽笛めいた呼吸音は夜の風に掻き消える。

「一発で仕留めよう」

『お前次第だな』

「外すわけない」

『くっちゃべっていいないで、集中しろ』

指に手応え。

肩に衝撃。

耳に残る風切り音。

見えるはずもない、銀の弾道。

暗視スコープ越しに見える、時を止めた生命。

小さく、息を吐く。

「終わった」

『…仕事が早い』

伊奈帆は手際よく荷物を纏め、武器を担いでビルの上上にワイヤーを固定した。伸びた先は数十階下、外階段の踊り場。ベルトの金具を引っ搔ける。柵を飛び越えた。

「褒めてるの？珍しい」

スレイン、と呼ぶと、銃が物を言うのが分かった。

『…たまにはな』

ライフルの銃床をひと撫でして、伊奈帆は壁を蹴った。シュルルル、という摩擦音と共に、空がどンドン遠くなる。髪を逆立て伊奈帆は思った。

足から地面に落ちていくのは、曲芸みたいで面白い。

初めて人を殺したのは、雨の日だった。

生まれ育った町は戦争の爪痕が大きく残るスラム街。

八歳だった伊奈帆は、走っていた。

誰も、雨の中傘も差さずに走りたいなんて思わないだろう。伊奈帆もそうだ。彼にはもちろん、理由も事情もあった。逃げていたのだ。

子どもだから。

売るなら若い方がいい。生きたまま奴隷にしてもいいし、ばらばらにしてもいい。パーツに分けた方が、高値で売れることも多いのだ。

生きたまま、腹を裂かれて内臓を一つ一つ抉り出される恐怖。身動きもできず搾取され続けるだけの未来。

自分を襲おうとする、未来なんて呼ぶには吐き気がする「その後」から逃げた。

抵抗すれば、あっさり殺される。レイプされて、あちこち切り落とされて、檻樓のように道の真ん中に転がる。

フラッシュバックする、黒い雨。

裸。

閉じない瞼。

口からだらりと垂れた舌。

指が全部折れていて。

散らかった、泥に塗れた黒い髪。

…一本だって、持つてくることはできなかった。

伊奈帆は、声を殺して走った。

世界のひび割れのような、狭い路地裏に滑り込んだ。何かに引っかかって転ぶ。

「いって…」

足元には、雨に濡れて光る自動小銃が転がっていた。

迷わず手に取る。頭蓋に響く声。

『助けてやる。トリガーを引け』

それが出会い。

狭いアパートの壊れかけた扉を蹴飛ばす。鍵はない。どうせガラクタばかりで、盗っていく物なんて新鮮な卵くらいしかないんだ。そういや、あと三個だ。明日買

いに行こう。

『先に拭いてくれ』

風呂場に直行しようとする、スレインが肩の上で言った。

「たまにはさ、人型で先にお風呂っていう選択肢ないの？」

どうせ二人とも埃と煤で汚れているんだから、風呂で流してもいいと思うんだけど。ここ数年、一緒にお風呂なんて入ってないし。

二人の間で時々行き来する会話だった。スレインが眉根を寄せてこれまで何度も言ったのは、風呂に入る前に銃の汚れを落とさないと、あちこち汚してしまうから。スレインはこれまでと長さも強さも同じため息を繰り返す言う。

『狭いし汚れる。あと、お前の目つきがなんか嫌だ』

怒らせてしまったみたいだ。そんな、いやらしい目で見てたかな。ちょっとだけ反省する。

荷物を全部担いだまま、蛇口を捻り、湯を溜める。バスルームを出て、薄汚れたタオルケットを敷いた床に手順を守って置いていく。まず、スレイン。次に、暗視装置。レーザー測量機と携帯端末が入ったドラッグバッグ。最後に、タクティカル

ベストの胸ポケットから使ったことのない予備の弾倉。これを使う日が来たら、きつと使う前に死んでしまう。お守りのように持っていくのは一応、生きる意志くらいはあるから。

ウエスで銃身を丹念に拭く。光沢が戻り、なんとなくただけどサツパリと気持ち良さそうな顔に見える。武器の顔がどこなのかは、分からないが。

人を殺した後、ブラインドが下がった薄暗い部屋で銃を磨く。割と荒んだ状況だけれど、嫌いじゃない。湯船の水音を少し遠くに聞きながら、スレインと無言で過ごすこの時間。

世界がこの部屋だけになったみたいで、とても安心する。

シャワーの水音が、壁を隔ててキッチンに届く。

パカ、パカ、パカ、と三つの黄身を割り解す。伊奈帆は砂糖三杯と目分量のめんつゆを入れて、ボウルを傾けて掻き混ぜた。とろりとして、いい感じだ。

フライパンの上で菜箸を振ると、じゅっ、と音がした。

これは、命のメンテナンスになるのかな。

心がある武器は、人間らしい暮らしをする事で長持ちする。逆に、乱雑に扱われればすぐ駄目になる。

どのような扱いを受けたかは、武器の人型年齢に現れる。

スレインと出会った時、僕は八歳だった。雨の中、並んで立ったスレインの人型は僕より頭一つ分背が高くて、見下ろす顔はいなくなった姉よりも年上に見えた。人間の年齢で言うと、十六歳くらいだったと思う。でもそのうち、彼が作られたのは僕が生まれる一年くらい前だと知った。要するに、九年間で十六年分の命を消耗させたということ。酷い目に遭った、と言っていた。今でも彼の体には酷い傷や凹みが残っているし、装填が上手くいかない時がある。以前無茶苦茶されて、体が受け付けないのだと。それでも近頃は、随分沢山弾を入れられるようになった。古傷だらけの銃身も、手に馴染んで柔らかな感触だ。

あの日。雨と血と硝煙の中、固くなった指を一本一本引き金から外した。血溜まりに落ちた武器は、発光して形を変える。現れたのは、人のかたち。あの時僕の体は八歳。スレインは十六歳。

今は、ほとんど同じくらい。もうすぐ追い越す。彼の背丈も、年齢も。

「いい匂い」

人型でタオルを肩からぶら下げたスレインが、顔を綻ばせて近づいてきた。

こんな食事、武器には必要ないのかもしれない。ガンオイルの手入れだけで、半永久的に形と生命を保つ。理論的には。

けれど、人間と同じものを食べられるように出来ていて、食べると美味しく感じて、人のかたちが美しく満たされるのは。武器の温度が、どこか優しく手を伝うのは。

きつと、作り手の愛だろう。そして願い。大事に使ってもらえるように。僕には、その作戦は大成功に思える。

「スクランブルエッグと出汁巻き卵、どっちが良かったかな」

スレインは、顎に手を当て三秒くらい上を見た。薄汚れた天井しかないが、彼が見るとつい追ってしまう。

「スクランブルエッグかな」

「残念、今日は出汁巻き卵」

テーブルに、二つの皿を置く。スレインが床のクッションに胡坐をかいて、なあ、と口を開いた。

「どうしていつも、料理が出来上がってから聞くんだ？」

どっちが良かった、って。

「だってさ」

伊奈帆も床に腰を下ろす。スレインの前に彼用の箸を置いた。自分のは、右手に。両手の親指と人差し指の付け根で、揃えた箸を挟む。彼も真似をした。両手の五本の指が、ぴったりと重なる。一緒にご飯を食べる人が変わっても、この質問を続けるのは。二人が一人と一挺になってからも、律義に守るこの習慣は。

黙祷のようなものかもしれない。

「当たっていたら、嬉しいから」

食べたいものが一緒ってのは、家族のような感じがする。

『いただきます』『いただきます、ます』

海賊×人魚

伊奈帆 (16) × スレイン (17?)

気が遠くなるほど長い螺旋階段を降りると、界塚伊奈帆は目の前の光景に目を奪われた。

「なるほど」

「上玉でしょう。今日の目玉です」

隣の男が、それ見たことか、と嫌らしく鼻を鳴らす。生地だけは上等な衣服は突き出た腹とはち切れそうな釦が並ぶ胸部で台無しだ。鈍重そうな見た目に反して、息一つ上がっていない。粘ついた眼光を隙なく光らせている。

この闇オークションの運営を任されているだけはあるかもしれない。

伊奈帆は男から正面の「商品」に目を移す。

巨大な水槽。その中で鎖に繋がれた生き物。

銀の鱗が光を反射して幻想的に輝いた。水槽の中で、伸ばして、曲げて、窮屈そうに水を蹴る鱈^{ひれ}。魚の腹から尾の美しい曲線を描く下半身。体の中心から上部に鱗はなく、病弱な姫君のような白い人間の肌をしていた。形のいい臍の上、肋の浮いた扁平な胸の上には刈り取られた葦が舞ったように色の違う部分があった。

「傷だらけだ。どうして？」

くるりと回り、背中にも同じ傷が無数にあった。肩甲骨の間に、背骨の凹凸が艶めかしく陰影を作っている。売人は蔑むように息を吐いた。

「以前の飼い主の趣味でしょう」

「その人は、どうしたの？」

「死にました。だからここへ流れてきたんですよ」

水中で、金の髪がゆらゆらと揺れる。まるで海面に映り込む月のような色だ。姿勢を下げて、髪が陽炎のように立ち昇った。見えた首は細くて白い。細い銀のチェーンが、囚われ人の首輪のように巻き付いている。

「一人？」

「は？」

「以前の飼い主の数」

「さあ」

ずっと見ていると、目が合った。カリブの浅瀬のような、透き通った海の碧。目が三日月のように細くなり、口から泡が立ち上った。人魚は笑った。

「オークションに参加しますか？界塚船長」

はっとして、水槽の中の双眸から視線を外す。心臓が早鐘のように鼓膜を揺らした。

コートの襟を整えて、トリコインを目深に下げた。呼吸を整え、踵を鳴らして背を向ける。

「気が向いたら、チケットを買いようよ」

「はい。融通しますから、私を通してください」

伊奈帆は肩越しに水槽を一瞥した。人魚は我関せずといった様相で海藻に指を伸ばしている。プチプチと引っこ抜かれた海藻が水中で木の葉のように舞った。

「餌は、何を？」

「海藻です。食べませんがね」

「だろうね」

「船長？」

「じゃあ」

物言いたげな男を置き去りにして、伊奈帆は螺旋階段を登っていく。地上と地下

を繋ぐ静かな空間に、固い靴音が響いた。伊奈帆は口元を綻ばせる。

海藻なんか食べるものか。

金の髪に銀の尻尾。美しい人魚。水槽の中で、退屈そうに海藻を耂り取っていた。

あの銀の鱗に覆われた下半身。ナイフのような先の細い尾鰭。

死を呼ぶ人魚の話。おとぎ話かと思っていたが。

あの傷痕。あのペンダント。噂も案外、馬鹿にならないものだ。

何人の飼い主を腹に収めたのやら。

地上に出ると、太陽の光が目を貫いた。伊奈帆は濃い影を引き連れて歩を進める。

サーベルがカチャカチャと鳴り、一度柄を撫でた。

さっき、目が合った。

碧の光彩の中、瞳孔が収縮する動きは捕食者のそれだった。

『スレイン、海は好き？』

『行ったことがないので、分かりませんね』

フ ォ ー ク × ケ ー キ

伊奈帆 (15) × スレイン (16)

※ ケーキベース設定

「…嫌？」

「いや…違…い、ます」

「痛い？」

聞くと、困ったような顔で首を振った。躊躇いがちに唇が開く。

「くすぐったい」

目尻の端から溢れた涙を指で拭い舐め取る。

「甘い」

「もう…」

舌に残る、清涼感のある香りと、濃厚な甘さ。既製品で一番近いのは、チョコミントのアイスクリームの味。でも、もつとずっと癖になる。

上げた顔を、もう一度落としてそこに近づける。持ち上がって、先端はてらてらと粘性のある液体を分泌して光っている。鼻先で、甘い官能的な青が濃く香った。

そこを舐め回しながら、指で小さな窄まりをつつく。円を描くように揺れると、昂ぶりは一層硬さを増し、細い腰ががくがくと笑った。

「んっ…アッ…ッあ、ア…!!」

「…すごく甘い」

「ンッ…も、う…ンあぁッ…!!」

じゅうつと強く吸うと、陸に上げられた魚のようにスレインの体が跳ね上がった。指で触れた場所も、びくびくと痙攣している。口の中に甘い蜜が次々に溢れてそれを飲み込む。

「ハ、ッあ…イ、…いな…ほ」

熱に浮かされて潤んだ目と視線が交差する。見えるようにゆっくりと舌舐めずり。潤んだ瞳にはつきりと期待の色が浮かんだ。

「美味しい。すごく」

白磁の頬が真っ赤になって、唇がわなわなと震えた。赤い唇は唾液に濡れていて、舐めると苺のように甘いだろう。

「も…恥ずかし…」

精液と、汗と、涙に濡れた肌に舌を這わせて余すことなく摂取する。甘くて、とてもとても美味しい。

「好きだよ。スレイン」

「伊奈帆…でも」

こんな体、と彼は消え入りそうな声で呟いた。胴体の付け根。色の違う肌に手を這わす。つるつるして、骨の出っ張りが白く透けた薄すぎる皮膚。

「どんな君でも、愛してる」

手のあった場所。足のあった場所。今はもうない場所をパントマイムのように撫で上げて、心臓の場所に口付けをした。ひくひくと物欲しそうにする窄まりに自身を押し入れる。どろどろで、感触がチョコレートみたいに甘く残る。突くほど、甘い液体が甘い声と甘い色になって欲望を掻き立てる。

ないはずの手に指を絡ませる。その場所には体液で濡れた冷たいシートがあった。「どんな体でも…どんな、姿でも」

傷だらけのトルソーは、デコレーションを根こそぎ食べられたウェディングケーキのように滑稽だ。でも、彼を食べた連中は知らない。中が一番美味しいんだってこと。

「スレイン」

『もっと早く出会っていたらなんて、夢を見ることはしない』

狩人×天使

伊奈帆 (25) × スレイマン (19?)

また、転んだ。

大体、こんなところに落ちてくるのが間違いの元だ。鬱蒼と茂った木々。無造作に転がる岩石。凹凸のある地面。腰の中ほどまで伸びる草。

「だからさ。意地を張らずにこっちに來たら」

「うるさい」

怒気を含んだ声が返ってきた。そんな言い方はないんじゃないか。こちらは一応、親切心で言っているのだから。

立ち上がろうともがくが、ますます傷が広がり羽が散る。あたり一面、白い羽の雨だ。

しかし伊奈帆は、助け起こすことはしない。

「天使って呼ばれてるの、知ってる？」

今度は無視だ。丈の短い服から伸びた手も足も、擦傷であちこち赤い線がついている。髪に泥と木の葉がついて、乾いて一体化している。これは洗うのが面倒だ、と意味のない想像をする。

「ねえ、名前はなんて言うの？」

「…お前」

振り返った顔。睨みつける双眸。歯噛みした口元。

敵意を漲らせた表情にほくそ笑む。いい顔だ。天使の口から、また怒声。

「嫌な奴だ」

身動きができない彼にずかずかと近づく。じっとこちらを睨んだまま、背筋を伸ばしていた。右の肩甲骨から生え、地面を覆う大きな翼を踏みつける。呻き声がかかる。

「これ、邪魔じゃない？」

返事はない。ぐりぐりと踵に力を入れると、背がぐっと丸まった。痛みに耐えて、歯の奥が鳴っている。

人の姿に翼を持つ生き物がいる。御伽話や聖書の中では、天使と呼ばれることもあるだろう。実際に信じている人間もいるかもしれない。

有翼人。

知能は人と同じかそれ以上。どういふわけで翼なんかを生やしたかは分からないが、彼らの住処は雲よりずっと高い。こんな地上に降りてくるのは、怪我か、病気

か、雷にでも落とされたか。生きている有翼人には滅多にお目にかかれるものじゃない。しかも、こんなに綺麗な人には。

しかし、そうそう売れないことも分かっている。こいつが、どうして落ちてきたのかも。

「片翼では、飛べないだろう。こっちも切り落としてあげようか」
ライフルを根元に押し付ける。喉が鳴る音が聞こえた。

本当に、どうしてこんなところに落ちてきたんだか。

僕がいる所に。

「お前の名前は？」

天使でも墮天使でもない。欠損した有翼人に名を問われる。

名前か。

いつからかな。この名が別の意味を持つようになったのは。

高値で売られる希少種を殺す。

ライフルで打ち抜き。ナイフで切り裂き。鉄線で首を絞める。

そして火をつける。

獲物を燃やす炎の色。

オレンジ色の死神。

選んだ道だ。後悔はない。

「伊奈帆。君は？」

「：スレイン」

前に出会った有翼人を思い出す。そういえば、色が似ている。肌と、髪と、目の色。有翼人ていうのは、そういう色なんだろうか。

まだ大人になる前。この森で落ちてきた彼女に出会った。怪我を手当てすると、空を飛んだ。小さな白い鳥が、天使のようなあの人の周りで囀って。僕の覚えている中で一番美しい光景。美しい思い出。

あの人は、罅り者にされて死んでしまった。

死よりも辛い生があることを知った。

だから殺す。

他の人間の手が掛かる前に。

スレインと名乗った有翼人は、にやりと笑った。骨が折れて変な方向に曲がった翼を、大きく開いて震わせる。血と泥に塗れ、飛ぶ力を失ってもなお、力強い羽ばたきだった。

純白の翼をはためかせ、この男が空を飛ぶ姿を想像する。青い空の中、雲を避けて、光を浴びて。

美しいが、ありえない未来だ。

「伊奈帆、と言ったな」

スレインの手が自身の首の後ろを叩いた。伊奈帆はライフルを放り投げる。

「首を落としてほしい」

僕はナイフを取り出し、逆手に持った。

断末魔。その言葉に立ち尽くす。

『どうして、その名を知っている？』

童×鬼

伊奈帆 (8) × スレイン (19?)

不気味に連なる鳥居の赤。

下駄の音が止まった。追いかけていた赤い布地もぴたりと止まる。

「ここから先は、いけません」

いつになく、厳しい声音だった。しかしそれで怯むようなら、こんなところまでしつこく追いかけてたりしない。赤衣着物に皺が寄り、彼がしゃがんで視線を合わせた。困り切った顔が近くにあつて、困らせたいわけじゃないんだけど、と口を尖らす。いつだって、困らせたくない。笑顔でいてほしい。ただ、話ができるだけでいいの。それが彼を困らせてしまう。

でも、嫌じゃないはずなんだ。嫌だったら、きっと何も言わずにいなくなるはず。

「いい子だから」

いい子だったら、こんなことをしていない。本当に優しい。

人間より、ずっとずっと優しい。

「手を、放してください」

絶対に放したくない。左手を、力いっぱい握りしめた。

笹が風を呼んで、竹林が揺らめき空気を揺らした。赤い空から不吉な鳥の鳴き声

が降り注ぐ。冷たい空気が、鳥居の向こうでそろりそろりと渦を巻く。

鳥肌が立ち、背筋が震えた。

「ほら、伊奈帆」

歯を食いしばり、恐怖に耐える。迷信なんかどうでもいい。それより今は、現実だ。この手を放すことは、絶対に嫌だ。

「手を放したら、君は行ってしまおう」

白い、僕よりずっと大きな手が、僕の左手を包み込んだ。

温かい。

名前を呼ぶ声。

「僕も行く」

「駄目です」

「どうして」

すぐ近くに、あの目があった。青白い白目の中心は、他の何にも似ていない色。青のような、緑のような、空とも水とも違う、不思議な色。その目が、綺麗なものを見ていることを知っている。汚い物ばかり好む人間より、ずっと、ずっと綺麗な

と思う。

「あなたは人なんですよ」

そんなの、今更言われなくても知っている。確かに人で、小童で、お金もなくて、力もない。家族だって、もういない。世の中をどうにかすることなんて、考えることもできない。無力な子ども。

「スレインは？」

髪が揺れた。夜の光を集めたような、綺麗な細い髪。いつだって、横目で見ていたこの色。

その髪の間から覗く、人ならざる三つの形。

尖った右耳左耳と、額の中心。

黄色く硬い角。

「僕は、人ではありません」

知っている。でも、今では僕の知っている誰よりも人間らしい。

悔しくて悔しくて、涙が零れた。

「どうして、そっちに行くの」

スレインの手が、僕の頭を撫でた。初めて会った時も、隠れて一人で泣いていた僕の頭を撫でてくれた。

あれは、お姉ちゃんが遠いところへ行った日だった。

「僕は人間を食べるんですよ」

赤衣着物。この色が、黒々と血を吸うところを見たことがある。

怖いと思った。でも、彼がいなくなるほうがずっと怖かった。

「僕だって、動物を食べる。牛や、豚や、鳥や、魚を食べる。それと何が違う？」

「全然違います」

「説明して」

風が止まった。空の赤は死んだように急速に色を失っていく。スレインの白い肌が、忍び寄る夕闇の色に溶け始めた。

目だけが碧い。そこから、水が溢れて落ちた。

「あなたが好きなんですよ」

首に抱きつく。突き飛ばされるかもしれないと思ったけれど、肩を受け止めて背を優しく叩いてくれた。硬い肩に鼻を押し付ける。血の臭いなんてしなかった。

「食べ物を好きになってしまふなんて、どうかしています」

耳元の掠れ声は、しんとした空に消えた。抱きついた首はどくどくと動いていて、服越しに重なった胸から生きている音が伝わった。

好きだ。大好き。

「食べてもいい」

「僕は、食べたくない」

「一緒にいたい」

「一緒にいると、食べてしまう」

今までのように、という言葉にさあつと背筋が冷え込んだ。

スレインは、どれだけの時間を生きてきたんだろう。

誰か、他の人を好きになったのだろうか。

そして、その人を食べた。

想像しただけで、悲しくて悔しくて腹が立って、叫び出しそうになった。

ごめんなさい、とか細かい声が何度も繰り返した。

何を謝るの？

僕が一番嫌なのは。

「死ぬの？」

聞くと、スレインは両腕でぎゅうっと僕を抱きしめた。髪の毛の匂いを吸い込む。霧の中にいるような香りがした。

「この世に生を受けたものは、いつか死にます。早いか、遅いか。自分で選ぶか、選ばないか。それらに大した違いはありません」

そりゃそうだろう。でも、死ねないからここまで生きて来たんじゃないの。

ねえ。スレイン。

「もう、会えないの？」

尻餅をついて、両手で体を支えた。頭を振って、はっと前を見る。いつの間にか僕は石段を五つも六つも転がり落ちていて、スレインは鳥居の下で佇んでいた。

「伊奈帆」

すうっと、足を動かさず姿が遠ざかっていく。鳥居を次々潜り、叫ぶ声がもう届かない。

「スレイン！」

頭の中に、声がした。

「あなたの夢に、会いに行きます」

伊奈帆は立ち上がり、鳥居の真ん中を駆けていく。いない。いない。誰もいない。神でも仏でも、鬼でも何でもいい。行先を教えてください。

スレインは、どこに行ってしまったんだ。

最後の鳥居の先の小さな狐の地蔵の前で伊奈帆は泣き、眠り、朝になってまた泣いた。そうして三日目の朝。同じものが見られるようにと、目を一つ供えて来た道に戻っていった。

『一つ目小僧が事八日に現れる』

学生×犬

伊奈帆 (15) × スレイン (16)

※もしも本編7話で合流していたら

ボタンを止める手が小さく震えているのが分かった。

「どうして？」

つい尊大な物言いになってしまふのは、大人げないと思う。しかし、こいつの態度にも問題があるんじゃないのか。

「僕は、犬ですから」

かちん、と脳味噌の中でハンマーが鳴った。犬だって？何かの喩え話だとしても、失礼過ぎるだろう。犬にだって、感情がある。人間にも。

伊奈帆は嫌な臭いの残る倉庫の窓を開けた。潮風が通り、ようやく大きく息が吸える。振り向くと、スレインが膝を立てて座り、手持ち無沙汰に手袋の裾を引っ張っている。

このコウモリを海に落とし損ねて、二十時間。

火星の姫と引き合わせ、事情を聞いてから十八時間。

なぜだか二人きりで食堂で食事をしたのが十五時間前。

ロックのかかる客室に、これもなぜだか僕が連れて行った。十二時間前に。

食事に誘ってやろうと仏心を起こしたのが二時間前で。

散々探して、やっと見つけたのが十分前。

逃げるように去った連中の「目」を記憶しておくんだって、と後悔したのが九分前。ここで起こったことに対して、その言い草はなんだと頭に血が上って六十秒。

振り向く。スレインは目を逸らした。また、頭の中でハンマーが振り下ろされる。この野郎。こっちは逸らしてやるものか。

「僕には、人間に見えるけれど」

目が泳いで、一度僕を見て、また泳いで、床を見た。さっきから床ばかり見て。何も無いぞ。もう掃除したからな。

「：貴方、馬鹿とか、真面目とか言われませんか？」

こいつは、人の神経を逆撫でする天才だな。

「言われたことはあるけれど、君にだけは言われたくない」

スレインは一つ息を吐いて、立ち上がった。軍靴の音が狭い空間に響く。目の前まで近づいて、彼は肩を竦めた。ほんの少し上にある猫目をじっと見る。眉尻が下がって、目が揺れた。自分の指先が、ぴり、と痺れたのがわかった。

何だ、今の。

「散歩にでも行きましょう」

「今から朝ご飯だよ」

「少しだけ。空が見たいんです」

突然、手を握られた。手袋の手。布越しの体温が熱い。

「なんで？」

聞くと、スレインは口を引き延ばして笑った。口の端の絆創膏が、とても白い。

「犬の散歩には、リードを着けるでしょう？」

「素直に、手を繋ぎたいって言いなよ」

手を引かれるのも癪なので、歩幅を広げて肩を追い越した。こんなところ誰かに見られたら、なんて言い訳しよう。

『空が青いのは、どうしてなのか知っている？』

勇者×エルフ

伊奈帆 (18) × スレイン (19?)

グロテスクな光景に、足が止まった。ぴちゃ、ぴちゃと岩壁から滲み出した水滴が床を濡らしていた。

一步。また一步と伊奈帆は近づく。ざわざわと、足元で茨が開いた。

おとぎ話の、茨姫のようだ。

「摘んでください」

風の音かと思うほど、小さな声だった。その声を発した唇は赤い。そこだけが赤い。

数百、数千ののたうつ茨。数万の棘が光沢を宿して震えた。

茨が交差して編み上げた檻のような球体の中に、瞼を閉じた白い顔があった。唇だけが赤くて、髪も肌も白い。：いや、暗い場所では判別できないが、髪はくすんだ金色だった。知っている。暗い部屋に差し込む光の線のような淡い色。睫毛が震え、瞼が開いた。そんなところが見えるほど、近づいていたことに驚く。現れた瞳の色に懐かしさが込み上げる。

スレイン。

あんまり綺麗な色だから。あんまり純粋に映すから。一度深呼吸して、覚悟を決

めて宣告する。

「もう、摘む花がないよ」

花は一輪もない。

白い顔から下の胴体。境目がよく分からない。途中までは完全に人間の若者の形をしているのに、そこから先が別の意志を持った生き物のような茨を生やし彼の手足となって蠢いている。おそらく肩のあたり、腰のあたりだろうか。そこから無数の蔓が這い出して一本一本が異なる動きで床を這いずり壁を伝い、彼の周囲に籠を形作る。この茨の一本一本に、数え切れない薔薇の花が咲き乱れていたなんて、もう誰も知らない。

空の青と海の青。風の青。雨の青。夜の青。世界中の愛を集めたような深い青。

彼の美しい心が、そのまま咲いたような。

『君に世界を見せてあげる』

小指と茨。棘が刺さって、小さく血が出た。その血を彼は吸ってくれた。

遠い昔の指切り。

まだ、ただの人間とただのエルフでしかなかった。世界を構成するその他大勢のうちの一。そうでなくなった時、きつとこうなることは分かっていた。

約束は。叶えられないと、知っていた。

「困りましたね」

眉を下げて、気弱そうな声で呟く。本当に困っているようだった。茨の檻に手を伸ばす。背伸びをして、隙間から彼の頬に手を伸ばす。中指の腹が顎に触れた。温かいのか冷たいのかは分からなかったが、そこにスレインがいるってことだけは分かった。真っ直ぐな視線がじつと僕の右目に注がれる。

「僕が分かる？スレイン」

破顔した。すごく、すごく嬉しくて、もっと近づこうと茨に体を押し付ける。頬と腕に棘が刺さったが、スレインの頬に右手が届いた。ひんやりして、少し湿っぽい。

「勿論。でも、僕はたった今あなたに呼ばれるまで、自分の名前を忘れていました」
「僕の名前を呼んでくれるかい」

赤い二枚の花弁に似た唇が嬉しい形を描いた。

「…伊奈帆」

じんわりと胸が温かくなった。こんな人間らしい気持ちになったのは、いつぶりだろう。スレインがもう一度優しく僕の名前を呼んだ。目、と言われて、自分が泣いていることに気が付いた。

泣いても叫んでも、時は戻らないんだ。

「スレイン」

美しい青。香り立つ薔薇。それは奇跡の花だった。欲深い人間に花を摘まれて死にゆく種族の生き残り。僕らは出会って、約束して、別れた。でも、僕は約束を守ることはできなかった。

君を守ることもできず。

君に見せるための世界を破壊してここに来た。

もう、何も無い。魔王も、魔物も、人も、動物も、木も風も。この洞窟の外にあるのは、おぞましい色に染まった空と海だけ。

おぞおぞと檻が開き、ようやく彼の体を遮るものがなくなった。両手で頬を包む。

手についた血が、彼の肌を赤く染めた。ああ、手を洗ってから来ればよかった。でも、綺麗な水なんてもうどこにもないからな。

額を合わせると、小さく彼が笑った。

「わかってたんだろう？」

ええ、と優しい声。目の奥が熱い。ぼたぼたと顎を伝う雫を、茨の棘が受け止めた。

「花が無くなれば、棘しか残らないのを」

「ええ」

「どうして花を摘ませたの」

「だって」

困ったように首を傾げた。人よりずっと優しい微笑みで、小さな子どもをあやすようにスレインは言う。

「花を貰って、嫌な人はいませんか」

この花を手渡された人は、幸せでしょう？

「君、馬鹿だろう」

「馬鹿じゃありません」

もう、君の花を摘んだ人は一人だっていないんだ。

僕が殺して来たんだから。

「…ねえ、キスしていい？」

「嫌って、言うと思います？」

目を閉じて、人間みたいに口付けをした。涙の味なんて、似あいすぎで腹が立つ。

「僕は、棘が好きなんだ」

「貴方、馬鹿でしょう」

抱きしめると、棘が体に食い込んだ。既に血まみれの服の下から、新しい血が次々布地を染めていく。

見ろ。見ろ。世界。ほら、誰もいないだろう。勇者を待み、平和を願ったお前たち。花を摘んでも、この棘で愛された人間は一人もいないだろう。

「そうなんだ」

棘に抱かれて、世界の終わりに耳を塞ぐ。

『空を、見せられなくてごめん』

書生×蜘蛛

伊奈帆 (17) × スレイン (3)

黒と黄色の細長い足。その足は獲物に触れようとした寸前ぴたりと止まり、おずおずと引かれた。

足の数を数える。

一本。

二本。

三本。

四本。

五本。

六本。

七本。

八本。

…沢山あるな。

「どうして食べないの？」

聞いたのは、その生き物が人の顔をしていたからだ。作り物以外で見たことのない、髪と目と肌の色。年齢があるかも定かではないけれど、顔つきは僕と同じか少

し上くらい。宝石のような目が瞬き、首が揺れて黄金の髪が散った。

「食べたくない」

人の言葉を話した。

伊奈帆は、八本脚の生き物の姿を頭の前から足の先までじっと見る。頭は人。とても美しい、西洋人形のような顔。首と胸と腰は艶めかしい白い人間の皮膚。でも、傷があつて所々引き攣っている。首には懐中時計のようなデザインのネックレス。そこまでは、現実の中のお話だ。その先の尻と手足。これが、もうまるきり蜘蛛なのだ。黒と黄色と赤の、毒々しい絡新婦の色彩。光沢のある昆虫の外骨格。縞模様の尻は風船のように大きく膨らんでいて、あの中にきつと内臓があるのだろう。食べたものを消化する器官が。

巣が撓む。

いい加減、腕が疲れてきた。粘性のある糸に引っかかって、もう半日だ。高かった日は沈んで、紫紺の空に月が浮かんでいる。森の木々が怒鳴り声をあげているように風が煩い。

「じゃあ、どうして糸を張っているの？」

食べたくない、って言った割には、解放してくれそうもないし。蜘蛛男はぎらついた目を僕に向けた。

「食べたいから」

そう言って、目を伏せ俯いた。訳が分からない。

「矛盾してるね」

「そうなんだ」

途方に暮れる化け物が、なんだか可哀想になってきた。そもそも、こいつのことを僕は嫌いじゃない。理由は分からないけれど、多分綺麗で、話が出来て、一人だからだろう。一人だけっていうのは、どうあっても寂しいものだ。特に、姿かたちが人と違えば。

「僕に、どうしてほしい？」

「何も。食べたくないだけ」

「じゃあさ」

見上げた空には丸い月。あ、似てるな。色が。髪の色に。

月は好きなんだ。

「ずっとここにいようかな」

月色の妖は驚いたように顔を上げた。戸惑った顔。ちょっと泣きそうな顔。人間みたいで、ほっと和む。

「君の体液に捕まってさ」

粘つく白い糸。これ、どこから出したのかな。口か。それともお尻だろうか。

…変なことを考えてしまった。

もしかして、浮かれているのかもしれない。この奇妙な生き物と言葉を交わせたことに。

「ねえ、名前はあるの？僕は伊奈帆」

「…スレイン」

「そう、スレイン」

雨に似た名前だ。月が出る日に、雨は降らないのに。

星降る夜の雨は、きっと月の色をしている。

ありえない想像にこそりと笑った。

ぐう、と腹が鳴る。そういえば、今日は何も食べていなかった。

「お腹が空いて死んだら、僕のこと食べてくれる？」

碧の目がじっと僕を見て、月が雲に隠れてまた現れる間までずっと見て、僕が何か言おうと口を開けた瞬間に首を振った。

「分らない」

スレインはそう言うのと、八本の長い足を小さく折り曲げて、叱られた子どものように蹲ってしまった。

「薄情だなあ」

幾何学模様の銀糸が月光で煌いた。

『足を食ったら、まん丸だ。ますます月に似ているね』

彫師×情人

伊奈帆 (21) × スレイン (22)

予感がして、障子を開けた。丁度白い着流しの裾が捲れて、着物よりも白く錯覚する素足が板目を踏んだ。秋風が吹き込み、白い手が髪を押さえた。柔らかい笑みが浮かび、親し気に口が開く。

「先生、こんにちは」

傾げた小首に、細い髪が影を作る。光の束のような髪色が作る陰影は、木々を透かす陽だまりのようだった。

「…いらっしやい。早いね」

「いいお天気だから、早起きしてしまっ

膝を折って下駄を揃える後ろ姿。華奢な項に、薄紅の鬱血が点々と散っていた。

「先生。金木犀がいい頃合ですよ」

立ち上がるうとした彼の髪を抓む。ぴたりと動きを止めて見開いた目がじっと僕の顔を見た。その鼻先に、抓んだ橙をそっと乗せた。

「香りを連れて来たね。スレイン」

鼻を滑った花卉に、目元が赤く染まった。

「あ、花びらが…ありがとうございます」

連れ立って床の間に入り、障子を引く。コン、コン。と木と木が閉じた音が響いた。

畳の上、斜向かいに腰を下ろす。姿勢よく正座する彼の全身に、美しい喩えが浮かんで消えた。

仄かに赤い唇。

「…君は、花は好き？」

スレインは口元に手を寄せてころころと笑った。界塚先生、と可笑しそうに名を呼ばれる。

「花を嫌いな人なんて、いるんですか？」

それもそうか。聞き方を間違えたみたいだ。

「一番好きなのは？」

「一番…」

美しい碧が揺れて、ここでないどこかを映した。畳の目に視線を落とし、そうして彼はそろりと言った。

「薔薇そうびでしようか」

「へえ」

血のような赤。切っ先のような無数の棘。蠢く蔓。

情念に狂う絡新婦のような咲き姿。

確かに、よく似合う。

「じゃあ、薔薇にしようか」

スレインの顔が上がり、晴れやかな表情が広がった。両手を胸の前でぼん、と合わせ、喜色を隠そうともしない声。

「やっと、決まりました？」

「うん」

青い血管。白い骨。赤い内臓。内部の器官が透けるような薄く白い肌に、慎重に鑿を刺す。束ねた針で肉を突く度、赤い粒がぷくりと浮かぶ様子は痛々しくも美しい。スレインは何も言わず、じっと動かず、死人のように仰向けに横たわっている。

目は開いているが、どこを見ているのかはわからない。少なくとも、天井なんて見
ていないだろう。

肌を破り、墨を入れる。その繰り返し。

この場所に彫るのは、随分と久しぶりだ。

臍の下。下生えの少し上。女性であれば、子宮が位置する場所。

淫紋と呼ばれる呪い。まじな

性的隷属を意味する施術。

受胎を可能にし、淫紋の男が子を成したという与太話くらいは聞こえてくる。

本当に効果があるのかは知らない。彫師の仕事は、彫って終わりだ。だから、そ
の結果起こった様々の事象については、わざわざ届けてくれる便りがなければ知り
えない。少なくとも自分は。

「先生…？」

「どうしたの？痛い？」

「痛いのは平気です。ねエ、先生。色は赤ですか？」

今彫っているのは、薔薇の蔓の部分だ。肌に刻む渋みのある青漆。

「花の色？まだ入れてないけれど、どうかした？」

スレインは喉を微かに震わせた。笑ったのかもしれないが、泣いているようにも見えた。顔のついでに、胸の肌が目に留まる。

染み一つない白い陶器が粉々に割れる。接いで接いで、取り繕う。確かに残る色の違う接着の後。破壊の後。そんな肌をしている。

壊れてしまう前の、汚れない白い肌。そこに針を押し付ける夢を、繰り返し見る。

「青にしてください。界塚先生」

薄氷のような声で我に返る。顔を見ると、妖のように怪しく笑った。

「薔薇を？変じゃないか」

「いいんです。どうせ僕は徹頭徹尾おかしいんですから、今更構いやしないでしょ

う」

青い薔薇。自然の色ではない。ありもしない不気味な花は、醜くも妖艶で彼には相応しいと感じる自分がいた。

僕も、相当おかしいみたいだ。

「まあ。珍しいから、旦那も気に入るかもしれないね」

スレインが心底可笑しいとでも言うように肩を震わせ笑った。この痛みで笑えるというのは、空恐ろしくもあるが。

「気に入るに決まっている。僕を飼っているのが、一番の証拠ですよ」
針に墨を吸わせて、微かに震える臍の下へ押し付ける。

今日の分が終わり、障子を開けるともう空が焼けていた。赤い夕陽が差し込んで、風が甘い香りを運んでくる。

金木犀か。

薔薇は、いつの季節だったろう。

「どのくらい、かかるのでしょうか」

スレインの声がした。白い着流しを色っぽく羽織り、やけにのろのろと帯を弄っている。

帯の下の、青漆の蔓。蠢く蛇のような。あの痛みを飼い慣らすのは、灼熱地獄で身を焼くよりも耐え難いだろう。

「一年くらいかな」

そんな痛みを露ほども感じさせず、この世の苦も知らぬような顔で彼は笑った。

「ゆっくり、彫ってくださいまし」

『ねエ、せんせ…ややこができたら、どうしましょ？』

オーデイン×フェンリル

伊奈帆 (c) × スレイン (c)

絹糸の細さに呻き声を上げるけれども、隻眼の男が近づいた。彼はけものを戒める細い糸に指を滑らせる。皮膚が割れ、指から血が滴った。その血が落ちる様子を、青い炎のように猛る碧の目が追った。

「騙したな」

生けるもの全てに、まだ見たことのない恐怖を植え付ける声だった。その声は甘いと言っているほど柔らかく、地獄の氷のように冷たかった。

腕も足も胴体も、口の周りも銀の糸のような鎖が巻き付いている。その細い細い鎖は穴をあけた巨大な岩石に念入りに固定されていて、けものは少しでも動くとも鎖が肌を傷つけ血を流していた。彼の足元には、大きな血溜まりが出来ていた。

「ああ。騙した。まんまと、思い通りになった」

隻眼の男がけものの肌の手を伸ばした。しかしどこもかしこも刃の糸が巻き付いていて、目の近くの髪を一房撫でるだけで終わった。

「でも、分かっていたんだろう？スレイン」

スレインと呼ばれた男は、声を出さずに笑った。目が親しみの色を湛え、悪戯小僧のような弾んだ声音でああ、伊奈帆、と男の名を呼んだ。

「お前のことだから」

見つめる瞳は、昔のままだ。変わらない。僕も、変わっていないと思う。変わってしまったのは、世界の方か。

「僕をどうするつもりだ」

スレインがどうでもいいことのように聞いた。実際、彼にとって自分の身に降りかかる事象など興味のあることの方が少ないだろう。伊奈帆は首を振った。

「何もしない。この世の終わりまで、そうしていてくれ」

この鎖は取ってやりたいが、そうもいかない。血を流しながらここで孤独に時を刻むのは酷だろうが、もう決めたことなのだ。

スレインが心底不思議そうに、伊奈帆の右目を見た。そして左目を。もう一度、瞼で閉じた右目を見た。

そうか。彼にとっては、逆だった。いつ反対になったのだったか。

「お前は何を考えている？」

僕の考えていることを聞くのなんて、もう君だけだよ。

「世界を終わらせようと思ってさ」

きよとんとした顔の後、スレインは大きな声で笑った。珍しい笑顔に、伊奈帆も笑い声が喉から漏れた。

まだ、笑えるとは。

「勇ましいことだな。最高神オーデイン」

「君もね。フェンリル」

ゆっくり足を踏み替えて、彼に背を向ける。視線を背中で感じた。

「伊奈帆」

「何」

緑豊かなリングヴィの島の風景と、青い空を左目に映す。彼はこれから、この美しい景色の中で孤独な生を約束された。

また、伊奈帆、と呼ぶ声があった。

「これで最後か」

振り向きたいが、それはしない。伊奈帆は誓いを込めて口を開いた。

「いや…もう一度会おう」

風の冬。剣の冬。狼の冬。世界の終焉を告げる冬の中で。

「その時は、君の牙で僕を殺してくれ」

天から星が落ちる時。僕は君を待っている。

太陽が消え、月が割れ。解き放たれたフェンリルがオーディンを飲み込む。

「ラグナロク」

ジュース×アイス

伊奈帆 (15) × スレイン (16)

※アイスベース設定

「…もっと」

「…いいの？」

「早く…ッ」

もう何度目だろう。柔らかく盛り上がった唇に触れる。息をするのも惜しいくらい、互いの唇を角度を変えて何度も貪り合う。体はどんどん近づき、密着した部位から次の段階への期待が高まる。

「んあ、ア…」

白い首に吸い付くと、甘い声が惜しみなく漏れた。仰け反った喉に、何度も何度も花を散らす。いやいや、と小さい子どもが首を振るように、小さな頭が左右に揺れた。

「い、い…なほ」

「なに…？」

「ア…服…ッ…邪魔、だから…」

ぎこちない手つきでシャツの釦に指を掛ける白い指。相手の釦を外そうと力を込めるが、体の焦りからか思うようにいかない。

「もう、早く…」

やっと釦から解放された服は床に散らばり、素肌の熱さと汗が窓からの風に鳥肌を立てる。薄黄色のカーテンが翻り、校庭の染み一つない白いハンカチのような健全が吹き込んだ。

誰もいない放課後の教室。窓際のカーテンの中で、互いの体を貪り合う。

「…スレイン」

「伊奈帆、早く…」

濡れて蠢く場所に自身を押し付ける。きゅんきゅんと奥へ奥へと誘う動き。きつい。でも、すごく気持ちいい。

「んあ…ア、アア…ッ！」

奥までじりじり進み、その途中でびくびくと中が痙攣した。髪が乱れて、華奢な肩ががくがくと震えている。締め付けが徐々にきつくなり、もう耐えられそうもない。

「あア…！あ、アッ…！！い、いあ…！！」

「ッ…出すよ…」

こくこくと首を振って、笛のような音がスレインの喉から聞こえた。ぐっと腰を押し付けた瞬間、高い嬌声と同時に凄い動きで中が収縮した。たまらず吐き出すと、温かくてじっとりとした幸福感が体中に広がる。汗でびっしょりと濡れた体を抱きしめた。背中に、彼の手の平の熱さを感じる。

瞬間。

氷のような温度が肌を刺した。

「スレイン？」

「あ、伊奈……」

変だ。

これはおかしい。

抱きしめた体が氷のように冷たくなって、気が付くと体中がびっしょりと濡れていた。

「……スレイン？」

床には、水浸しの制服。

誰もいない。

濡れた手。

雫がぼたぼたと床に落ちて、水溜まりを広げた。

「スレイン？」

いない。

誰も、いない。

残ったのは、床で夕日に光る水だけ。

「…アイス、だったの？」

溶けて。溶けて、水になる。

「僕は？…ジュース？」

知らなかった。

知らなかった。

知っていたら、告白なんてしなかった。

スレインで濡れた手。足。体。机。鞆。床。服。

違う。それは錯覚だ。

もう彼はいない。

「あああ」

夕焼け色の教室で、
ずぶ濡れの少年の気が触れる。

『溶けちゃうくらい、
幸せ』

科学者×モルモット

伊奈帆 (21) × スレイン (22)

※ 「君とお揃い (dove さん)」 「君の欠片 (鳴海)」 その後

「やあ、調子は？」

電子音がした。——まあまあ。

「今日はあれを試そう」

——あれって？

「目を入れよう。前に使っていたやつ」

——嫌だ。

「大丈夫。両方入れるから」

——お前のも？

「そう。前は上手くいったから」

——じゃあ、お前のやつから入れてくれ。彼はいいやつだ。

「ちょっと妬けるな」

——自分に妬いてどうする。

「君ってさ。そういうところあるよね」

——何が？

「人たらし」

—。

「何か感じる？」

— お前がいるのは分かる。

「今、瞼をこじ開けて目の奥に指を突っ込んでるところ」

— うわ…。

「綺麗なピンク色だよ」

— …わかっていたけれど。お前、変態だろう。

「多分、君のせいだよ」

— …。

「冗談だって」

— お前の冗談は面白くない。

「…繋いだ。どう？」

— ああ。ああ、分かる。久しぶりだ。

「僕抜きでエンジンと会話するのをやめてくれる」

— …あ、見えた。

「スレイン？」

——…久しぶり。界塚。

「…久しぶり」

——何だ、これ？

「君の体。…の一部」

伊奈帆はぐるりと室内を見渡した。

天井に電灯はない。立方体の室内。壁面にはコンピュータが埋め込まれ、クリスマスのイルミネーションのように点灯している。大小さまざまなモニターから発生する青い光とノイズ音。ゴムやビニル、カーボンの管がメデューサの頭のように蜷局を巻いて床を埋め尽くしている。ごぼごぼと、ざあざあと、彼の体に循環する液体が管を通り抜ける音。その管が密集した場所にある、スチールの台。その上の裸体。傷の残る素肌の面積に、眉を下げる。…こんなに減ってしまった。

腕があった場所と、足があった場所。足の間と腹の上。首の中程。そこから赤、青、緑、黒。灰色のチューブが生えている。いや、生やした。

初めて目にするには、刺激が強すぎるかな。

「調子はどう？」

見下ろしたスレインの左目が、ギョロリと僕を見た。モニタから、電子音が長短で彼の言葉を僕に伝える。

——悪くない。

『王子は燕が恋しくて、目を差し出した。少しの間でも、引き留められるように』

軍人×囚人

伊奈帆 (18) × スレイン (19)

「調子は？」

「お前は、いつもそれだ」

椅子を引く前に、怒声がやってきた。伊奈帆は手を止めて、正面に座る男をまじまじと見る。顔も怒っている。ということは、相当怒っている。

動きを再開して腰かける。つり上がった目は追跡ミサイルのように僕の顔を追いかけた。

「何？」

「調子は、調子は、調子は。分かりきっていることを聞くな。腹が立つ」

ダン、と骨と木が衝突する音がした。痛いと思うのだけれど。彼はその拳をぶるぶると震わせた。

「調子なんて、最低に決まっているだろうが」

こんなに大きな声を出すのは、初めて面会した時以来だ。

伊奈帆は、テーブルの上で重ねた手の上下を入れ替えた。トントン、と人差し指で指の甲を叩く。

「僕には、今日の君は調子が良さそうに見えるけれど。スレイン」

悪い目つきがさらに悪くなった。口が大きく歪む。

「馬鹿言え」

吐き捨てるような言い方で、数センチ身を乗り出した。

「君から話を振ってきたし」

今度は返事をせず、いや、できないのか、じっと動きを止めている。目だけが揺れていた。多分、怒りのせいだ。

「僕の目を見ている」

大きく見開かれた目に、一瞬だけ浮かぶ透明な色。

感情の凪いだ、恐ろしいほどありのままに世界を映し出す目の色。

僕は、これが見たい。

「これは、調子がいい」

スレインは大きな溜息をついて、背もたれに荒々しく体を押し付けた。椅子が床を擦って、耳障りな音がした。

「お前の思考回路はどうかしている」

確かに、人を怒らせて喜んでいるのは一般的ではないかもしれない。

スレインの目は、怠そうに伊奈帆の手元を見ている。あの綺麗な色は一瞬だけ現れ消えてしまった。もっと見たいのだけれど。

「界塚」

何となく会話の糸口を取りこぼしていると、スレインが低い声で名前を呼んだ。

「何」

「もっと、話をしてやろうか」

不敵な顔だ。こんな、良しにしろ悪しにしろ生命力を感じさせざる顔を見ることは稀だ。一度瞬きをして心を沈めた。

「言ってみて」

スレインは上手くいった、とでも言いたげな顔で首を傾げ、ゆっくりと目を閉じた。瞼の静脈が青白く透けて、二重の皺が伸びてつるりと眼球の形にカーブする皮膚。直線的に伸びる長い睫毛の繊細さ。生え際の神々しいまでの白さ。目頭の鋭さと目尻の細さ。ゆっくりと瞼が開く様子は、月食の終焉を見ているようだった。

現れた虹彩。なんという色だろう。なんという温度だろう。

「僕の間を見ろ」

言われなくとも、逸らすことなどできない。遠い恒星のような目に囚われる。

吸い込まれそうだ。

「もっと近くで」

言われるがままに、顔を近づける。碧がどんどん大きくなって、その中心の漆黒も大きくなる。

瞬きをしないのだろうか？

そう思うくらい、ずっと碧に映されている。

「そう。何が見える？」

何？何って。碧しか見えない。海のような。空のような。氷のような。炎のような。美しいものだけを集めて、冷やして固めたような瞳しか。

「何が見える？界塚」

その内、その目が鏡のように透明に澄んで止まった。遅れて、自分の顔を認識する。小さな二つの球体に映った自分の顔は、色味も定かではないのに蒼白に過ぎた。

怖いのか。僕は。

スレインが身を引いた。首を左右に曲げて、骨が鳴った。

「自分がどんな顔をしているか、分かったか？」

何も言えない僕を、スレインの両目が槍のように鋭く突いた。冷汗が髪の下をじとりと濡らす。

「お前が、僕に会うのはな」

電灯がなぜか一度点滅した。スレインの顔の影が濃くなり、亡霊のように浮かび上がった。口角が上がる。唇が開く。喉仏が上下する。

地の底のような、低い声。

「ドッペルゲンガーに会うようなものさ」

さも可笑しそうに、スレインは片手を舞うように翻し三度笑って身を乗り出した。瞳が風のない湖のように危なっかしく僕の目を投影した。目尻と口元に細い皺が寄る。白い歯が見えた。

そして、響く。

「お前、死ぬぞ」

スレインは、笑った。目を輝かせ、歯を見せて、声まで上げて。青白い肌に浮かぶ骨の影。くすんだ髪の揺れる動き。見えない心に操られ。美しいかたちが作り出す。

人ではないような、畏しい笑い顔。

『ドッペルゲンガーを殺してみないか？』

あとがき

この度は本を手にとっていただきありがとうございます。

ある土曜日の昼下がり、「そうだ、人外書こう！」と軽いノリで書き始めるとあれよあれよという間に性癖の扉がパカパカ開き、気が付けばあまりに興味に奔った性癖丸出しの本が出来上がりました。本当に好きなものだけ詰め込んだので、少し恥ずかしいです。

本編のスレインがあまりに美しいので、もはや人を超越しているのでは？と常々思うところはありました。しかし色んな人外を妄想したゴール地点にいたのは本編スレインです。「やはりスレインを越える人外はいなかったのだ。人間が一番恐ろしいのだ…囚人スレイン最高だった」と悟りを開きました。やはり公式に還る。ゼロに還る…。です。

「科学者×モルモット」はdoveさんの神小説「君とお揃い」(Pixiv

novel/10199131)の続編をリレーさせていただいた「君の欠片」(Pixiv novel/10199177)のさらに続編です。私のこうしたい、あれしたい、を優しく受け止め

てくれる doveさんは天使です。好きです（告白）。

「孤児×武器」は十月初めにツイッターでビッグウェーブが押し寄せ、あまりの性癖クリティカルヒットに眩暈を覚えました。拳銃、ライフル、バズーカ、マシンガンだけではなく剣とか槍とかその他諸々、ありとあらゆる武器スレインが見たいです。

「学生×犬」はDVD 一気見勢として、リアタイの臨場感を味わってみたかったので。妄想ができて満足です。高校制服伊奈帆×青服スレインはよきものですね!!
色々妄想して、一番幸せな時空はアルドノア学園かもしれない、と実感しました。

◇イメージソング

「Death Disco」 SEKAI NO OWARI ちゃん

「大切」 FANKY MONKEY BABYS ちゃん

四方山話にお付き合いいただき、ありがとうございます。次の本でもお会いできそうですように。

鳴海

Cross Bleed

発行 Scramble/鳴海

発行日 2018.11.18/ZEROの方舟 osaka03

印刷所 (株)しまや出版様

Mail jineg720@yahoo.co.jp

Twitter @narumiblue

PixivID narumi07

本作は制作会社、関係者、及び関係団体とは一切関係ありません。
無断転載、ネットオークションへの出品などはご遠慮ください。